

J S A

北海道支部ニュース

No. 284

2006. 1. 25

日 本 科 学 者 会 議

北 海 道 支 部

事務局 〒 060-0807

札幌市北区北7条西1丁目
バームハイツ札幌201

振 替

02740-1-6811

TEL. FAX

(011)707-2299

Eメール

jsa-hokkaido@mc6.sings.jp

北海道支部 ホームページ : <http://www.jsa.gr.jp/hokkaido/>

JSA本部 ホームページ : <http://www.jsa.gr.jp>

新年のご挨拶	-----	1
第4回全国常任幹事会	-----	2
第3回支部幹事会開催	-----	3
E C S T A III	-----	3
憲法9条フォーラム	-----	4
市民講座報告	-----	5
科学談話室	-----	6

2006年をJSA北海道支部の飛躍の年に

JSA北海道支部代表幹事

山田 定市

明けましておめでとうございます。

内外ともに多事多難であった昨年にかわって、今年こそは将来に向けて展望を切り拓く年にしたい、との思いを多くの会員の方が強く持っておられるのではないかと思います。

私たちにとって身近かな研究・教育の状況を見ても、新自由主義の「小さな政府」路線にもとづく攻撃は容赦なく降りかかり、大学・試験研究機関も独立行政法人化を主軸とする再編が予想を上回るテンポで進む中で大きく様変わりしつつあります。

しかし、反面ではこのような閉塞状況を打ち破る新たな動きがさまざまな領域で広がりつつあることも確かです。憲法改憲反対の「九条の会」もすでに全国で四千を超えており、さらに急速に増えつつあります。この活動には北海道でもJSA北海道支部の会員の多くが参加していると同時に、支部としても独自に「憲法9条フォーラム」を班を中心にして開催しています。また、日ごろの支部活動においても、去年は地道ながら幾つかの試みを実現しております。

支部会員の研究の蓄積をもとにしてJSA『日本の科学者』(2月号)の誌上で「北海道における自然エネルギーの現状と課題」をテーマとする特集が組まれました。さらにアスベストの問題が社会的にあらためて注目されてくる中で、支部としても会員が専門領域を生かした立場で支援活動に参加してきました。

また、有志会員による「地球温暖化問題勉強会」の発足、支部総会・幹事会などの開催時にあわせた「会員研究談話会」の開催、「大学問題ワーキンググループ」の活動、などは、いずれも情勢に対応しつつ地域や住民生活にかかわる活動に積極的に取り組むという支部の姿勢にもとづく活動であるといえます。

これらの活動のペースにあってこれを支えているのは、それぞれの職場や地域に根ざして続けられている個々の会員の研究活動ならびに班活動の蓄積であると思います。

また、個人会員による「JSA北海道支部第3水曜の会」の活動が地道に続けられ、その「ニュースレター」が178号に達しようとしていることも注目されます。 →

⇒ JSA北海道支部にとっても、今年には1966年の創設から数えて40周年という記念すべき年にあたります。支部としても40周年記念事業を実施することとなり企画・実行委員会を中心に準備にあたっているところです。「専門に根ざし、専門を越えた活動」を旗印にして絶えず地域に目を向けて蓄積してきた活動を振り返り、新たな活動の展開に向けて展望を見いだすことを目指しております。具体的に、エネルギー・環境問題を中心とする記念科学シンポジウムの開催、研究・教育の領域をはじめさまざまな分野で活動している若い人々への働きかけを目的とする連続講座の開設、支部活動40年の年誌・年表作成などについて企画・準備中です。

いま政治、経済、社会状況をめぐる対決点と矛盾がいつそうあらわになる中で、文部活動が会員にとっていつそう魅力に富み、あわせてJSAに期待される社会的役割に対してより積極的に応えることができるようにするために、ともに考え行動する一年になればと願っています。

第4回全国常任幹事会に参加して

第41期第4回全国常任幹事会が2005年12月10日12:00から早稲田大学で開催されました。公式の報告は別途あると思いますので、ここでは私が重要だと考えて部分についてのみの報告といたします。

日本科学者会議第16回総合学術研究集会が2006年12月1日から3日に東京で開催が予定されていますが、その1st Circularの素案が示されました。テーマは「諸科学・技術の到達と国民生活～平和と生活向上のため科学はいま何が問われているか～」となっており、具体的な意見を求め内容を確定することになりました。

「憲法9条フォーラム」は12月末までに全国で20回されることになっており、その広がりを見せていることから、次期大会まで引き続き活動を強めることを確認しました。北海道支部としては、条件が整ったところから複数回開催する方針であること、12月1日に札幌学院大学で開催し「憲法9条フォーラム in SGU」の報告をいたしました。

この会議で特に議論になったのは雑誌『日本の科学者』を自費出版から書店から出版して広く普及するようその具体化が編集委員長から求められたことでした。

研究基金常任委員会の議論では、研究助成審査委員の提案がありましたが、そこで未定であった「法・政」分野の委員として北海道支部の神谷会員を推薦しました。本人の了解が得られることを条件に決定となりました。

最後に37回大会の準備のための日程を確認しました。2月25日に草稿が送られ3月5日の第5回全国常任幹事会で討議されます。大会は5月27日の第3回幹事会を経て5月27日-28日が予定されています。
(千葉正喜)

%%%

事務局からのお知らせ 会費の自動払い込み制度を開始しました。どうぞご利用ください

今年度から会費の郵便局自動払い込み制度を開始しました。2006年度分の会費を2006年月末に自動払い込みとなる制度です。是非ご利用ください。詳しくは支部事務局までご連絡ください。

2005年度 第3回支部幹事会のお知らせ

第3回 JSA 北海道支部幹事会を下記の通り開催します。お忙しい折とは思いますが各班の幹事の方はご出席ください。幹事の方が出席出来ない場合は、代理の方の出席をお願いします。

また、会議終了後「会員研究談話会」が下記の通り開催されます。こちらへも是非御参加下さい。

記

- ◇ 日 時 2006年3月5日(日) 9:30～14:00
- ◇ 場 所 北大工学部社会工学系第二会議室 A151 (工学部正面玄関入り 1階左手奥)
- ◇ 議 題
 1. 支部創立40周年事業
 2. 憲法改正問題
 3. 「研究者の権利・地位宣言」
 4. その他(06年度支部大会、16総学ほか)
- ◇ 報 告 支部活動報告ほか

会員研究談話会

幹事会終了後、下記会員からの話題提供に基づく談話会を開催します。会員の皆様、是非御参加下さい。

照井 日出喜 氏 (北見工大班)

『現代ドイツの劇場システムについて』

★ 日 時 : 2006年3月5日(日) 14:00-15:00

★ 場 所 : 上記支部幹事会会場(北大工学部社会工学系第二会議室A151)

☆☆

ECSTAⅢに参加して

「アジアにおける科学・技術の交流、協力Ⅲ」(略称 ECSTA Ⅲ)が日本科学者会議創立40周年記念国際シンポジウムと銘打って、12月11日に早稲田大学で開催されました。全国常任幹事会の翌日ということで、北海道から千葉が参加しました。本間代表委員から開会の挨拶がありましたが、学生を連れての中国との交流の紹介があり印象的でした。

午前はパネルディスカッションで、「持続可能社会を実現するために」と題して議論がされましたが、中国の環境問題に議論が集中したように思います。日本の高度成長期の公害とその克服の経験を交流し、人々の被害苦しみを繰り返さないようにすることが重要だと感じました。

午後は、「世界の中のアジア」ということで、Irfan Habib氏(インド Aligarh Muslim 大学)と宮地正人(歴史民俗博物館)の二つの講演がありました。北村実さんが討論のまとめをして、浜林代表委員が閉会の挨拶をされました。

ポスターセッションもあり、有意義なシンポジウムであったと思いますが、こじんまりした参加者でした。
(千葉正喜)

市民講座「アスベスト問題を考える」を開催

北大農学部 東山 寛

昨年12月7日に市民講座「アスベスト問題を考える」を開催しました。講師に勤医協札幌病院の佐藤修二医師をお願いし、「アスベストによる健康障害」の演題で1時間ほど講演して頂きました。

昨年6月末の新聞報道をきっかけに今や社会問題として大きくクローズアップされるようになったこの問題について、佐藤医師の講演は豊富なスライド資料を紹介しながら、①何故今アスベスト問題か、②石綿による健康障害、③石綿曝露者の健康診断と治療、④現行法での被害者救済制度、⑤今後の課題、の5点を柱に問題の全体像に迫る内容でした。また、司会進行は支部幹事の福地保馬氏が務め、参加者との間で活発な質疑応答がおこなわれました。参加者の関心は、①石綿（アスベスト）とはいかなる物質であり、何に使用されているのか、②石綿かどうかを判定する方法はあるのか、③石綿による健康障害、とくに予後が悪いとされる中皮腫に対する治療法はあるのか、また、どこに行けば早期発見できるのか、④どのような予防措置があるのか、といった点に集中しました。

佐藤医師からは、分析機関などについて北海道庁HPの「北海道アスベスト情報」が有用であること、石綿関連疾患は早期診断が重要であり医師も以前より注意深く診断するようになっていくこと、中皮腫は恐ろしい病気であるが新しい抗ガン剤の使用などにより一人でも二人でも助かるのであれば希望があること、石綿障害予防規則（2005年7月施行）により労働者を雇用する事業者の責務が定められていること、労災保障制度は裁定請求主義であり認定への支援が必要であること、労災補償の傘の下にいない人への補償の充実が必要であること、国・企業責任を曖昧にさせないこと、これ以上無駄な曝露を受けないようにすることが何よりも大事であること、などが話されました。

質問は尽きず、この問題に対する関心の高さがうかがえました。なお、参加者は30名弱でしたが、市民講座にふさわしく圧倒的に会員外の一般参加が多く、科学者会議の社会的役割を改めて感じました。多忙な時間を割いてご助力頂きました佐藤先生にこの場を借りて改めて感謝申し上げます。

北海道支部新年会 へのお誘い

会員の交流の場として、日本科学者会議北海道支部「2006年新年会」を下記の要領で開催します。会員の方々の参加をお待ちしております。なお、同日常幹会議を午後6時より支部事務所で1時間弱行います。

☆ 日 時： 2006年2月9日（木）午後7時から

☆ 場 所： 北前そば高田屋 北8条店 （札幌市北区北8条西3丁目28番地
（札幌エルプラザ地下1階 TEL 011-757-5201）JR札幌駅北口より徒歩3分。

☆ 会 費： 3,500円ほど

☆ 申 込： 2月7日までに、科学者会議道支部事務所（Tel/Fax 011-707-2299）
または江見（Tel 011-706-5556）あてお願いします。

大学・拝金主義・市場原理、論文ねつ造、研究者の倫理

△ 大学を定年退職してから10ヶ月が経とうとしている。相変わらず日本の大学の厳しい現状を思い知らされたのは、「日本の科学者」1月号である。私立大学についての特集であるが、とりもなおさず日本の高等教育の構造的病理(重本論文)がえぐり出されている。▽ 時を同じくして、韓国・ソウル大での「ES細胞論文ねつ造事件」が世界を駆けめぐった。他国事ではない。世界にはびこる拝金主義・市場原理が学問の効率偏向評価を一層助長する危険性は無いのか。悪しき業績評価の犠牲でもある。上記1月号はまた、世界人権規約(今井論文)やユネスコ宣言(重本論文)の重要な解説も紹介されている。△ 科学者会議が昨年10月に出した「研究者の『権利・地位宣言』『倫理綱領』」(素案)の討議に多くの会員が参加される事を期待したい。
(兼編集後記 増子 捷二)

1978年に筆者がパリ大学で始めてから四半世紀以上経ったキセノンガスの核磁気共鳴(NMR)法による多孔質物質の研究は何をきっかけに始められ、どうなったか。

(カット図省略)

その当時、ゼオライトの空孔(直径数Åの規則正しい構造の1次元、2次元、3次元のトンネル)内には強い電場が存在しているという仮説があった。パリ大学の研究室に行き、教授からそれをNMR法で計測することはできないだろうか、と持ちかけられた。

ゼオライト空孔内にはガスを送り込めるので、何らかのガスを吸蔵させて、そのガス分子(プローブ分子・原子)のNMR信号の形、シフトから電場に関する情報を取り出せないだろうかと思いつき、検討した結果、 ^{129}Xe 原子が最もふさわしいプローブ原子であるとの結論に達した。その主たる理由は、不活性ガスなので被観測物に影響を与えない、単原子分子なので異方性がない、スピンの $1/2$ であるので四重極のことを考えなくてよい、原子番号が大きいので大きなシフトが期待できる、等の特性をもっているからである。

被測定物としては最初にY型ゼオライト中のNaイオンを水素原子核(プロトン)と置換した試料を用いた。プロトンは電子を持たないのでその近傍には大きな電場があるはずだと考えられていたからである。ところがプロトンの置換量を変化させても、その影響は無く、電場らしきものは観測されなかった。その代わりゼオライト中へのXeの吸蔵量を変化させてXeNMRのシフトをプロットすることにより、Xe原子とゼオライト内壁の衝突と、Xe-Xe同士の衝突の項を分離することができ、これはこの分野における最初の論文として1980年夏ナポリで開催されたゼオライトの国際会議で発表された。この時すでにカチオンをCaIに換えたものも少し測定しており、シフトのXe量に対する変化がNaやH(プロトン)とは異なる振る舞いをする事を見付けていた。しかし論文には説明なしのデータのみ載せておいた。XeNMRの手法により空孔の大きさ等を測れるのである。

その後2価以上の電荷を持つカチオンの場合はゼオライト空孔内に電場を作ることを見付けたり、数十種類に及ぶ異なった構造のゼオライトや空孔内に金属微粒子を内包するゼオライトを研究した。

(カット図省略)

現在までにゼオライト研究以外の高分子化学や医学の分野等にまで適用され、世界中で利用されている。

左のカリカチュアーは1984年7月ベルリンで開催された国際会議で発表した時Xeガス原子のゼオライト空孔内における振る舞いを表す数式を視覚化したものであり、研究者の記憶の中に長く留まっていた。